



あゝ学舎よ夢多き



根室高校HP QRコード

【全校生徒】高校生防災会議 … 特色ある教育活動

10月19日(木)、根室高校 高校生防災会議を行いました。毎年、根室市と連携した活動が行われています。今回、全校生徒のおよそ半分の250名に防災小説を書いてもらい、代表者2年生3名による発表が行われました。経塚留衣さん、山内香菜子さん、加藤煌稀さんにインタビューしました。



経塚 留衣さん。震災後、復興するため一人一人の被災者が希望を持って生活することを書きました。文章を書くにあたり苦労したことは、津波がどの程度のものかが分からず、根室市のハザードマップをもとに想定して、津波から避難するために、まず高いところへの避難するために学校の4階としました。

山内 香菜子さん。小説の設定が細かく定められ制限もありましたが、導入から展開ではどんでん返し場面を設定して、読み手が面白いと思ってもらえるよう工夫しました。終わりをバッドエンドとして、災害の怖さや悲しさ表現することで、災害で大切な家族が命を失わないよう、防災意識を高めてもらうものとししました。誰かが亡くなる設定としたため、両親を亡くす設定では自分自身が悲しくなるため、自分を犠牲にした内容にしました。私の母親はこの小説を読んで涙を流していました。

加藤 煌稀さん。愛犬がいるとの設定で展開しました。震災前、動物は吠えたり、その周辺を駆けずり回る行動を起こすと言われています。また、自分も予知夢的なものを見ることもあります。兄弟が消防に務めていることもあり、人の命に関わる内容として、被災して助かるとの設定にしました。地震が起きた際に、適切な行動が取れるよう書いてみました。

★2枚目以降、3名の小説を掲載しました。ご覧ください。



今年度、高校生防災会議を担当し、防災小説への指導に関わった **木村雄介先生** にも話を聞きました。根室市担当者や講師の菊地先生と計画を練り、今回、防災小説に挑戦しました。被災を経験をしている生徒は多くないため、被害の状況や避難所等に係る報道記事や写真などを用いるなどして、自分事として考えてもらうようにしました。生徒達は本当に一生懸命考えて取り組んでくれました。

【学校行事】 第2回避難訓練 校長から (地震編)

10月19日(木)、高校生防災会議と同日の午前中、第2回避難訓練を行いました。訓練後、校長から話をしました。(訓練の様子は学校Pをご覧ください。)

本日は、根室市消防本部から職員の方にお越しいただき、ご指導、及びご講評いただき感謝申し上げます。さて、前回、第1回目は火災の避難訓練でした。本日は、地震が起きた場合の訓練となりました。改めて、地震発生時における防災に関する知識や意識を持って欲しいと思います。防災の知識や意識を持つことで、命を守り、怪我を防ぐことができます。大きく二つの話をします。今回、震度6の地震を想定していますが、立っていることは難しく、床に這いつくばりながら移動しないと動けません。一つ目に、①物が落ちてくる(照明、時計)、②物が倒れてくる(テレビ)、③移動してくるなど、地震発生時に起こりうることを考えたり意識し、命を守ること。そのようなことが起こらない場所に身を寄せることも必要となります。戸外では、ブロック塀、自動販売機、ガラス・壁、電線、マンホールなどが隆起することもあります。2018年、大阪府で震度6の地震があり、校舎前にあるブロック塀が40mにわたり倒れ、小学生が亡くなる痛ましい事故もありました。二つ目に、津波や火災が考えられます。特に、地震が起きたらまず高い場所に避難してください。津波から身を守ること。津波の高さは、東日本大震災では最大40mといわれています。(電柱は13mくらい、その3倍の高さの津波がくる。【昆布が被さる高さ】 職員玄関の高さが、海拔43mなので、それ以上の高い場所に避難してすること。改めて、命を守るために、その時、その場でどのような行動が適切であるか、自己で考え、実行する力！ が大切です。

二月十四日、今日は一年間で最も憂鬱な日 と言っても過言ではない。バレンタインなどと世間は言うが、結局はバカ騒ぎしたいカップルが盛り上がっているだけである。心の中で悪態をつき、スマホの画面を眺める。呼吸をするたびに白い息が漏れてくる。今の気温はマイナス十度、迎え待ちとはいえ外に居るのははやめておくべきだったと後悔する。来客者用玄関の屋根の下で、かじかむ指先に息を吹きかけ、迎えの車が来るのを待つ。その時だった。一瞬、空気が静まり返った。少しだけ嫌な予感がした。全身の毛が逆立ち、体から血が抜けていくような感覚。来る、確かにそう思った。すると、カタカタという音と共に、地面が小さく揺れ始めた。地震だ。地震に対して恐怖心はあるが、きっと今回も大丈夫、そう思っていた。だが、そんな期待は打ち砕かれた。ぐらりと地面が横に動いた。世界が傾き、九十度回転した。もちろんそんなわけがなく、20 × 20自分が揺れによって倒れたのだと分かった。倒れた時にぶつけたのか、膝がじんじんと痛む。しかし頭はどこか冷静で、持っていたトートバックで頭を隠しながら地面を這い、玄関の階段を下りた。その瞬間、パリンという音が聞こえ、きらきらとしたものが広範囲に降り注いだ。その音が鳴ってから、人の声やモノが倒れる音がより大きくなった。雪の上に落ちたのは窓ガラス。揺れに耐えきれず割れてしまったのだ。あのまま玄関にとどまれば間違いなくけがをしていただろう。地震が起きて数分後のことだった。スマホから大きなアラームが鳴った。どこか不安を感じさせるアラームに耳を傾けつつスマホを起動すると、大津波警報が発令されていた。警報を見た途端、走馬灯のようなものが見えた。走馬灯は、命の危機が迫っているときに記憶から何か危険を回避する方法がないか脳が探す際に起こるものと言われている。頭の中でぐるぐると思い出が巡る。すると、とある言葉が20 × 20聞こえた気がした。「津波は到達するまで数分かかる場合もあります。焦らず、しかし迅速に避難してください。」いつかの避難訓練で言われた言葉だった。私は立ち上がり、割れたガラスの扉から学校内に入った。たった一言だが、私は大きな勇気をもった。数分もあれば四階に上がることができる。学校内の状況は最悪で、廊下中にガラスや物が散らばっていた。転びそうになりつつ、なんとか四階に到達した。階段近くの教室に入ると、避難していたのか何人かが固まって座っていた。座っている一人に話を聞いてみると、どうやら部活動や自習をしていたらしく、自分と同じように四階に避難したらしい。仲間を見つけたことにより安堵したが、窓のほうに目をやると黒い渦が家を飲み込んでいた。窓を開けると金属のこすれる嫌な音が鳴っていた。津波… …、波なんかじゃない、大きな金属の塊、津波は恐ろしい20 × 20ものという考えはもともとあった。しかし、水だという考えもあった。津波をなめていた、はっきりと分かった。絶望に包まれる中、ラインを開いた。画面には赤枠にライン安否確認と書かれていた。「安否を報告」をタップすると、友人や家族のメッセージが上がっていた。みんな無事そうだということを知り安心した。避難所にいますというメッセージを残し、スマホを操作する。新しく作ったグループラインには、校舎内にいると思われる知り合いを全員入れた。波が引いたら避難者が多く来るだろう。避難所設営にはやることが多い。仮設営のトイレは男女別にしなくては、子供を連れている人たちには授乳室なども必要だろう。絶望している暇はない。こぼれる涙をぬぐいながら黒い波を睨みつけた。今に見ている。絶対に人間は負けない。沈みゆく夕焼けに背を向けて、再建の一步を踏み出した。

あの音に、今でも私は呪われている。私が記憶していた故郷の町は太陽に照らされてより一層輝く海に囲まれていた小さな港町だったはず。それが如何して、建物も人も自然も何もかも全てが忌々しい警報音を合図に一瞬で消えていった。「知らない、こんなところ私は知らない!返せよ!」誰一人といなくなった終末世界のような土地に一人立って、かつて愛していた海に向かって声を枯らして何度も叫ぶ。しかしそれに腹がたったのだろうか、波が私めがけて突如として襲い掛かる。逃げる間もなく私は波にのまれて、という夢を毎度見るのが私の日課になった。かれこれこれが一か月以上続いている。慣れ始めてきた自分のメンタルを誰か称えてほしいくらいだ。まだ覚醒しきっていないなまりきった体をゆっくりと起こしぐいっと一つ伸びをする。いまになってようやくと使い物になってきた目で窓から差し込む日差しを感じる。果たしてどのくらい眠ってしまっていたのか、場合によっては怒られてしまう。と噂をすれば「あれ、起きてたの。おはよう」聞き覚えのある声が後ろからして顔だけ声の主のほうを向く。「噂をすれば…、あの…お母さん怒ってる?」しまった、つい心の声が漏れてしまった。まあ素直すぎる故の行動だ、仕方があるまい。「ええ?なんで怒んなきゃなんないのさ」「だってもう昼過ぎくらいでしょ?私寝すぎてない!?!」私の体感的に11時過ぎてしていると予想するが「いや?今8時だよ。まあもう少しで起こそうとは思ってたけどね」予想が外れてしまったがこの外し方はいい事例だ。例えるなら、テスト返却の時に自分の予想点数をあえて低く見積もり返された実際の点数は大幅に高かったというこれに似ているだろう

「…それはそうとまたうなされていたよ？あれからずっとだよ、大丈夫そう？」先ほどまで私の後ろにいた母だったが喋りながら私の隣にきてゆっくりとしゃがみ込む。母の動きを追うように私もまた顔だけ動かして視線を合わせる。「え、嘘。またうなされてた？」「うん、酷くなってる。やめてとはいえないけどさ、結構びっくりするよ」苦笑いを浮かべて述べる。「私もやりたくてやってるわけじゃないしなあ…、しょうがないよ、うん」

目には目を歯には歯を、苦笑いには苦笑いで返す。それに対して母は何か言いたげそうな顔を浮かべ口を開こうとしたが、そのとき「ねえ〜奥さん！ちょっと手借りてもいい〜！？」知らないおばさんが大声で母のことを呼ぶ。避難所の体育館であるがゆえにとっても響く。だからこそ余計声が大きく聞こえ親子そろって肩をびくっとさせる。「はい！いいきますー！あんたも早く準備してシャキッとしなよ」へいへい、とやる気のない返事をして母を見送る。さっきまでとは違い、素早く立ち駆け足でおばさんのほうへと向かう。切り替えの鬼とはこのことというのだろう。しかしまたうなされていたということを知り気分がよくない。ただでさえ“あの日”“から寝られない人がいる中で、私が寝るたびにうなされていてはたまったものじゃない。「…準備しなきゃな」外へ出ると快晴であったが悲しくなるほどの殺風景で、崩壊した建物と瓦礫の山の中で人がちらほらといるだけであった。「…もう三月か」スマートフォンをポケットから取り出し日付を見てはため息をつく。そんな街を重い足取りで歩く。忘れもしない2月14日、なんの前触れもなしに一瞬にして根室を襲った大震災。いくら町の人間が総出で復興作業をしようとも、一割も進んでいるかどうかといったところだ。「お嬢ちゃんにそこで突っ立てるの？具合でもよくないのかい？」後ろから今度は聞きなれない声がする。いや、初めて聞く声だ。「えっ、あ、いや大丈夫です！それよりすみません、通行の邪魔しちゃって…」驚きと戸惑いを隠しきれずに、振り返りとさきに謝罪をする。そこにいたのは自分よりも背丈がぐく、腰の曲がったお婆さんだった。手にはレジ袋を持っている。「ううん、いいんだよ。でもね人生の先輩をなめちゃダメよ。顔が疲れ切ってる」「…そうですか？でもほんとに平気ですよ。ただすこしばーっとしてただけなので」「いや、それが疲れの証拠だよ」妙に意見を変えないお婆さんであった。自信に満ち溢れた顔でこちらの心配を何度もしてくれるが、少し反応に困ってしまう。「ほれ、このみかんおいしいんだよ。疲れもとれちゃう代物さ。一個持ってきな」そういうとレジ袋からゆっくりとした手つきでみかんを取り出し、こちらに渡そうとしてくる。「…そのみかんってもしかして支援品だったりしますか？」おそろおそろ聞いてみるも、「若い子がね、気にすんじゃないよ！こういう時はね、ありがたく受け取っておくんだよ」そういって私の手を強引につかむと手のひらにみかんを置く。「あ…あはは、それじゃあお言葉に甘えてもらいます。ありがたございます」あまりにも強引な渡し方に苦笑まじりにお礼を言う。しかしまったく顔も知らない人からの送りものはちょっと怖いと思ってしまうのは正常だろうか。「…、なあお嬢ちゃん、少し話を聞いてくれないかい？」どこか遠くを見つめ、すこし間をおきお婆さんがまた話しかけてきた。しかし先ほどの明るさは消えて、すごく悲しそうな声色だった。「…私でよければ聞きますよ」どこかゆっくり話せるところがなにかとあたりを見回し、最近設置されたであろうベンチを見つけ、「あちらのほうで話しましょう」お婆さんの手を引き、歩幅をあわせながらゆっくりとベンチのほうへ向かう。

「よっこしょ…、少し歩くだけでも息切れしちゃうから、歳だねえ」椅子に腰を掛け、リラックスした口調で話しはじめる。「あはは…、それで、お話って？」「ああ、そうだったね。…お嬢ちゃん高校生だろ？」「そうですね」私がそう返すと、お婆さんはまた悲しそうな声で「そうかい」と呟く。

「…、うちの孫ね、高校三年生なんだけど。津波にのまれちゃって、見つかってないの。看護師になりたいくて四月から札幌のほうで学校行く予定だったんだけどねえ…」お婆さんの口から出た話はあまりにも重いはなしで、なんと返すのが正しいのかかわからず黙って聞くことしかできなかった。

「背丈がね、孫に似ていたから話しかけちゃったの。ごめんなさいね、怖かったよねえ…」はとなり「全然平気です、お気になさらず」とすぐに返事をする。「お嬢ちゃんは大丈夫だったの？ご家族とか…」「…あ、えっと。…はい、みんななんとか避難出来て無事ではあります」正直、この話の後に自分の話をするのはとても言い難かった。「気使ってくれてんのかい、？」それを感じ取ったのか、お婆さんはさみしげに笑ながら返事をする。

「…もしもお嬢ちゃんに夢とか、やりたいことがあんなら、精一杯やるんだよ」「…はい、頑張ります」私の返事を聞いたお婆さんは、満足したのかよいしょと声をだして立ち上がると、「お互い頑張ろうね」と目を細め優しく微笑む。お婆さんの手を引き、途中まで送るとすぐに娘さん、正確にはお孫さんのお母さんが迎えに来ていた。厚手の上着を着ているがやせ細っているのがわかる。二人が自分に気が付くと、こちらに一礼して帰っていく。二人の姿が見えなくなるまで手を振る。「…、ますますこのみかん食べにくくなったなあ」だれもいないのいいことに独り言をつぶやく。でもお婆さんの話をきいたら余計家族に会いたくなってしまった。私の祖母たちは沿岸部からは少し離れたところに住んでいるため、全員無事だった。同様に母と父も職場にいたおかげで無事であった。しかしその安否を知ったのも災害発生後からしばらく時間がたった後であった。安否がわかるまでの間の時間は生きた心地はしなかったといっていたのを思い出す。もちろん私もである。

「あれ？ここまで歩いてきたの！？」

今私は自分のお婆ちゃんとたちがいる避難所に足を運んでいた。驚きながらも「元気かい？」と私の頭をなでながら安心したような笑みを浮かべて話す。その近くには叔母とその娘がいた。「だっこ！だっこ！」娘さんは私にとって従姉妹にあたる子でありまだ幼く、一人っ子である私にとってはかわいくてしょうがない。まあたまにめんどくさくなる時はあったが、「このみかん、一緒に食べよ！おいしいよ」視線を合

わせるようにしゃがみみかんを取り出しては、目の前でむく。目を輝かせながらみかんを待つその姿は目に入れてもまったく痛くないほどのかわいらしさだ。その反面叔母は「ええ？ どういう風の吹き回し？」と笑いながら言ってくる。一言多いなと腹が立ちながらむき終わったみかんの一粒を従姉妹の口元にもっていく食べさせる。「ん〜！ これ！ すごいあまい！」ほっぺたを抑えながら全身を使っておいしさを表現してくる。私もその流れに乗って一粒食べると、甘酸っぱさが体にしみわたる。あのお婆さんの言う通り疲れが取れていくような気がした。「にしてもなんで急にこっちきたの？ お母さんは？ 一緒じゃないの？」

突然来た私にずっと疑問を抱いていたであろう叔母が私に話しかける「別にいいじゃん！ 会いたくなったの！ えーとお母さんはいまほかの人の助っ人でなんかしてる」質問攻めにうざったさを感じつつもすべてに答える。どうせまた何か言われるんじゃないかと思ったが「ふうん、そっか。」と仕方ないと言わんばかりの笑みを浮かべて返事をする。「それだけ？ まあでも、お母さんに怒られるのも怖いし、まだまだ後片付けもあるから私はもう帰るよ」私がそういうと「もう帰るの！？ きた意味ないじゃん」と呆れられながら入り口まで見送りに三人が来てくれる。私が帰ろうとした直前にまだみかんを口に入れている従姉妹が、ぎゅと私の手をつかむ。「ん？ どしたの？ まだいてほしいの？」嬉しさ交じりの声で問いかけてみれば一言だけ「きをつけてかえるんだよ」と言ってくれる。「ありがとう、そっちも気を付けるんだよ！」頭をわしゃわしゃなでてあげる。正直名残惜しいが、それでも帰ると決めたには帰るしかない。小さい子特有の手の温かさにほっこりしながら、震災の面影がいまだずっと残った、足場の悪い道を警戒しながら慎重に歩く。「やっぱりあいに行ってよかったな」寒さで意識が現実と呼び戻される。ぼんやりとした意識の中でも自分の体温が死人よりも冷たくなっていると実感する。果たして生き埋めになって何日が経ったのだろうか。「誰か！ 誰かいるか！ いたらなんでもいいから返事をくれ！」

誰かの声がする。その声に縋るように助けを呼ぼうとしても瓦礫の破片入りの土が口内に入り込み、声を出すことすらまななかなかった。まあ大声を出せるほどの体力は残ってなかったが。(なんだったんだろう、この走馬灯みたいな記憶生きることへの執着よりも一刻も早く苦しさから抜け出したいという思いが勝ってしまった。どうせ死ぬのなら、家族ましてや災害のことなんて思い出さなくなかった。何も考えずに死なせて欲しかったのが本音だ。全身の力が抜け、瞼も重くなっていく。また瓦礫が崩れる音がしたが、先ほどまでははっきりと聞こえていたのにだんだんと聞こえづらくなってきた。(…もしも、自分が小説家が漫画の主人公なら、どうしてたかな)くだらないことを考えられるほど、自分は最期まで呑気だったな。救助隊数名がさきほど崩れた瓦礫のほうに目をやると、手だけが顔を出していた。「おい！ こっちに手みたいのが見えるぞ！ 誰かいるかもしれない！ 人手をくれ！！」「こっちこっち！ 早く！」足場の悪い地面を一斉に駆け抜け、目的の場所へと急ぐ。冷たくなったぼろぼろの手を、人の体温で暖かい手で強くつかみ、救い上げようとする。その力強さとは反面、遠くからかすかに聞こえる波の音はひどく優しく、自分には関係ないと言わんばかりの穏やかさであった。大災害の根源である波は、何も知らないのだろう。

【あとがき】 この物語にしようとした経緯は、小説の醍醐味である読者をひきつけるような表現をしたうえで、どうやって震災のリアリティを入れるかを考えていたらこうなりました。震災というテーマだからこそリアルにするためには死を感じさせるような表現を入れたくて、どうしようか悩んだ結果自分を使うことに決めました。でも本当はもう少し明るい内容にしようとしたのですが、自分が読んでいてまさかこんな落ちだったとはとなるのならこれがいかなって今の話に落ち着きました！ ちなみに最後は絶対死んだらと思うかもしれませんが、瀕死の状態で助かった方も実際にいると思うし、あえて直接的な死んだという表現をせずに人の解釈にゆだねるような言い回しにしたのもこだわりポイントです！ 自分の家族だけの話じゃなくてほかの人の話も入れることによってリアリティを追求できたと思ってます。

防災小説テーマ「解瓦と復元」

北海道根室高等学校 2年 加藤 煌稀

もし本当にあるのなら自分は信じてよいと思う能力があるそれは「予知夢」だ。過去自分は何度か予知夢を見てきていてそのほとんどが的中していた。そして数年前に自分は予知夢で地震が来る予知夢を見た。当時の自分はそのままで気にせず日常生活を送り続けて数年がたった頃、その予知夢が的中することになる

令和6年2月14日 自分の家族は妹が札幌に移住していて、姉は別の地域におり、兄とは別で住んでいて犬二匹と父親と母親と自分が住んでいる。その日はバレンタインでその日は自分はインフルエンザにかかって学校を休んで家で寝ていた日だ。高熱によって中々眠れなく、1200ごろに自分は腹がすいて下に向かった。朝朝食を食べていなかったからか風邪にかかっても食欲のほうで自分は勝るようだ。そして自分は飯を食べ終わり二階に戻ろうとしたが面倒くさくなり、1階の茶の間のソファで横になってスマホを見ていたら、数年前から買っている犬2匹が寄ってきて、自分の周りで寝始めたようだ。そんな中自分はスマホでネットニュースを見ていてある記事が目にとまった。その記事の内容は、「地震の直前に犬が吠えたり、遠吠えや震えてうごかなくなる」というニュースを見た自分は興味本位でその記事を見た。その記事の内容は過去日本で大きな地震が起きる直前に犬が吠えたり、その場でぐるぐる回ったり物陰や隙間に逃げ込んだりするというのを見たという飼主1000人にアンケートを取ったもので、特に多かったのが「犬が吠える」という現象が一番多く次に「犬が物陰に隠れる」という現象が多いという記事であった。

この現象は自分も何度か見たことがあり、過去に震度3、4の地震がきたときに自分の家の犬もそのばでぐるぐる回ったり、自分の近くに来てブルブル震えながら鳴いていたことがあった。

自分は犬を見て心の中で「もし仮にまた起こったらどうするべきか考えて、行動に移せるようにしておいたほうがいいな」と思い他の記事を見た。その中でも特に根室に地震が30年以内に大きな地震学起こるという記事が何本もあり自分はスマホをもって喚起をしに二階に向かった。そして自分の部屋には兄から借りたスーツケースがあり、その中には旅行から帰ってきてまだ片づけていない衣類と充電コードが入ってる。片づけようとしたとき、兄から電話がきてスーツケースを明日取りに来るとの連絡だった。その連絡を受けて自分は片づけるのを止め1階に戻った。そして2時間が経過した当たりで犬が突然吠え始めた。また外の人や動物に吠えているのかと思って見てみたら外ではなく海のほうに向かって吠えているようだ。もう一匹の犬は自分の懐の所に来てブルブル震えながら鳴いている。どうしてだと考えていたらもう一匹の犬が吠えを初めて自分はどうしてかと考え込んだ。その時さっき見た記事を思い出し、自分はこれが地震の予兆なのかもしれないと思い「ないとは思うかもしれないあった場合がやばい」と考え急いで逃げる準備をするために家中を駆け回り外に出ようとした瞬間、今まで感じたことのない恐怖感と危機感を感じ、自分の脳内アラームが鳴いたましくなっているのだろうか体中から発汗し何か嫌な予感を感じた。こういう時の自分の嫌な予感はいまだに間違っていないから本当にまずいと感じ外に出ようとした瞬間、揺れを感じた。10秒たったころ次は今まで感じたことのない大きさの揺れを感じた自分は玄関に座っていたため手を使えば移動はギリギリできる。そして玄関に飾っていた飾り物が落下し玄関がめちゃくちゃになった。2分くらいたったのだろうか。地震が収まり家の中を見てみると家の中はテレビが倒れ、花瓶が落ち、物が散乱している。遠くて波がぶつかる音が聞こえ外に出てみたら港はもう30cmほど浸水していてさらに第2波が沖から来ているのが目に見えて自分は全身が震え、恐怖と焦りを強く感じた。次の瞬間自分はやばいと感じ、犬と一緒に坂を駆け上がった。今風邪をひいている自分の体のどこにこんな体力があるのかと思いつつ「急いで逃げないと死ぬ」と思いながら全力で走った。そして坂を上り切り後ろを見てみたら自分の家が海水によって浸食されているのが目にはいった。海の遠くで10mはあるであろう津波が押し寄せてきているのが目に入り自分はさらに恐怖感を覚え急いで建物の上に上った。そして30分たった頃にはもう地面は水で埋め尽くされ、建物は倒壊し、海に流されて海水が通った後は更地になっていた。そして数時間がたった頃、さっきよりもでかい津波がきている。そして建物の上で1日生活をし、次の日になると昨日に比べて海水の水位が下がってきている家から持ってきたのは二匹の犬と、旅行で使った衣類と日用品とお土産とレトルト系食料と食べ物だ。数日前に旅行に行ってきたため充電コードや日常生活に必要なものはある程度はそろっておりスマホやモバイルバッテリーも3個所持していて、心底自分は運がいいなと思いつつ正月に引いたおみくじの大開運に感謝した。そして数日がたった頃へりて救助隊員がへりて救助しに来た。その中には兄の姿もあった。そして建物の上でいた自分と他の人達も救助され移動した。移動した先では1000から2000人程の人が避難しており、多種多様な職種の人が避難しており自分はそこで3週間生活した。

運がいいことに母親と父親は移動した先の避難所におり、家族全員がそろった。

避難所で生活する中でまず問題になったのがいびきや子供の泣き声、部屋のスペースの狭さが問題になった。問題は他にもあり、それは風邪だ。本当は風邪が完全に治ったわけではなくかなり体がだるく、頭が熱く痛いままでも今にも倒れそうなくらい体調が悪い。正直に言って極限状態に近い状態だったからとにかく風邪を治すために兄のところに行き医者で診断してもらったところ、軽い風邪であり、数日で治るとのことだった。

数日間風邪に悩まされている中外では街の復興に向けて行動する者もいれば、食料を確保するために行動する者もいた。そして3日後自分はついに風邪を治した！！あれから避難生活

2週間目の2月28日 海外からもレスキュー隊や支援品が届き、配給された。街の復興に向けて避難していた人達やレスキュー隊が復興作業を始めた。倒壊した民家からまた使えそうな木材や物を収集したり漁師や漁業関連の人たちが知識をフル活用し、魚を捕獲及び釣り上げるために尽力する姿など各々が自分自身の知識と経験をフル活用し街の復興を目指した。そんな中自分は物を収集したり、物を運んだりなど力仕事をしていて。昆布をやっていたおかげで長時間動き続けることができ、毎日くたくたになるまで動き続けた。そんな生活をして数か月した頃、根室を繋いでいた橋の工事が始まった。しかし、修復しきるには早くて2年、遅くて3から4年くらいかかるようだ。しかし、海外の支援金や技術が集まり、1年半で橋が完成するとの吉報を受けた。あの天津波から1年がたち今でもまだ復興作業は続いており、少しずつ民家や病院ができて始めており、生活も少しずつ安定するようになってきて橋ももう少しで完成までも少しまできている。その数か月後橋が完成した。その数日後インフラ整備が始まり、本土や札幌からのトラックや重機人員や車が通り始めた。そして天津波から数年がたった今は令和10年の3月あれから街はほとんど元の状態まで戻り、町中に車が通るようになったが悲しいお知らせもありそれは重軽傷者1237人死人3478人行方不明者約2000人と計6715人の被害者が出ていることが分かった。その中には自分の家族関係の人や兄弟もいる。亡くなった人達を弔うためにそしてこのような歴史を忘れずに後世に伝えるために大きな石碑が作られた。

それからさらに数年がたった頃自分は漁師になって昆布を取って生計を立て、生活していた。

この歴史を後の世代に死んでいった兄弟の分生きなければならない。この歴史を忘れることはないだろう……

あとがき

今回書いた文章の内容は、本当に起こったときにおそらく自分がするであろう行動をそのまま書いたものです。そしてこの中には本当に自分に昔から備わっている能力を書いています。どれか当ててみてね。初めて書いたのでどこか文字が抜けていたり時系列が変になっていたりしたらごめんなさい。

ここまで見てくれたあなたは俺と一緒に昆布をやろうじゃないか！！待っているぞ！！